藤原宮
大極殿院の調査

飛鳥藤原第 198 次調査　現地説明会資料

（独）国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部

調査区東寄りの上層礫敷（南から）
※運河の埋立範囲を中心に礫敷が残る

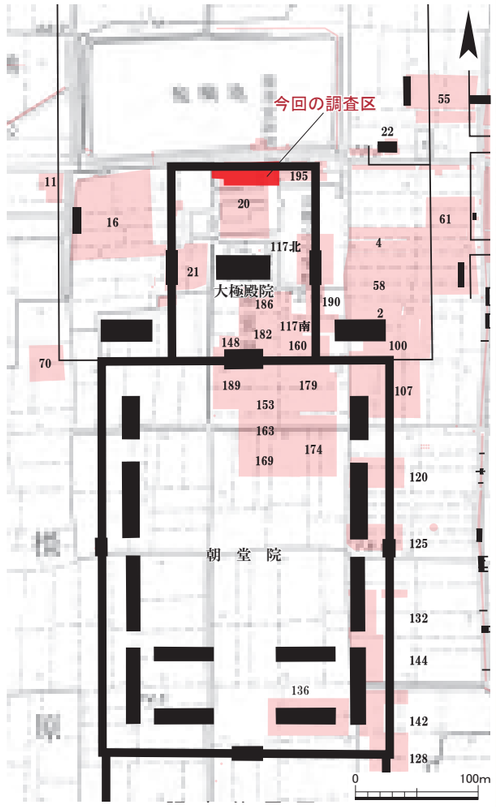
東西溝 1 の屈曲部分（南から）
※北に折れて南北溝 4 となる

調査区東寄りの下層礫敷（南から）
※運河を埋め立てた部分が大きく地盤沈下する

南北溝 4 断面（北から）
※下部に瓦を詰めて暗渠とする

下層礫敷の細部（北東から）
※黄橙色の砂質土の上に拳大の礫を敷き並べる

調査区西寄りの礎石据付痕跡
※据付穴内に根石がよく残る



調査位置図
※調査地は大極殿院北面回廊と北門推定地にあたる

大極殿院北面回廊・北門から
畝傍山を望む
2018 年 8 月 28 日撮影

藤原宮 大極殿院の調査
（飛鳥藤原第 198 次調査現地説明会資料）
2018.9.15

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025 奈良県橿原市木之本町 94-1　http://www.nabunken.go.jp
Edited by S.Hirose・M.Kuriyama

大極殿院北面回廊の中央部を発掘調査しました。これまで不明確であった北門の存在や北面回廊の構造が明らかになり、大極殿院全体が綿密な設計と高度な測量技術にもとづいて造営されたことが裏付けられました。また、大極殿院北部の整備状況や排水処理の様子も判明し、藤原宮の造営過程を考える上で重要な所見を得ることができました。

藤原宮は694年から710年まで営まれた宮殿です。藤原宮の中心部に位置する大極殿院は、回廊で囲まれた東西約120 m、南北約165 mの空間です。大極殿院の調査は、戦前の日本古文化研究所の調査（1934・1935年）に始まり、戦後は奈良文化財研究所が継続的に調査を進めてきました。その結果、回廊は礎石建ち瓦葺きの複廊であることが判明しています。しかし、北面回廊中央部については、北門や回廊の位置や構造、内庭の整備状況などに検討の余地が残されてきました。今回はその解明のために、過去の調査範囲も含めて、北面回廊の中央部を広く発掘調査しました。

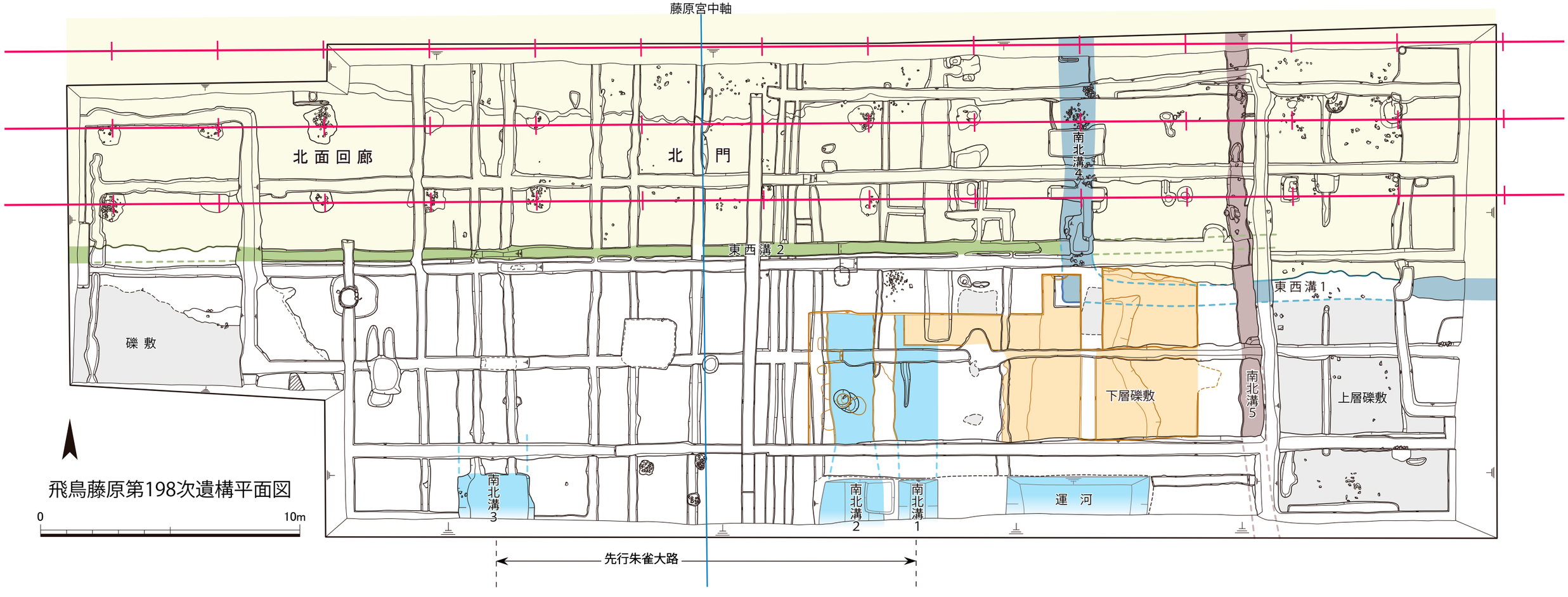
藤原宮造営以前の遺構　藤原宮の造営に先立って設けられた朱雀大路とその東西側溝、藤原宮造営の資材搬入のための運河を確認しました。運河を埋め立てた部分は、大きく地盤沈下をおこしています。

北面回廊・北門　棟通り筋と南側柱筋の礎石据付痕跡12間分（23基）を検出しました。礎石はすべて抜き取られていますが、礎石を据えるための穴と根石が残存します。柱間寸法は、桁行約4.1 m（14尺）、梁行約2.9 m（10尺）ですが、藤原宮の中軸線が通る中央間のみ16尺となります。北門は、中央間を他よりも2尺広げて出入口としていたようです。また、中軸線から昨年度に検出した東面回廊の棟通りまでの距離は約58.3 m（200尺）となり、北面回廊の東西幅は400尺に復元できます。

礫　敷　調査区南部で内庭の整備にともなう礫敷を確認しました。礫敷は2回にわたって施されており、最初の礫敷は内庭の中央部のみに施工されたようです。

排水溝　回廊の基壇裾には雨水排水のための溝が掘られています（東西溝１・２）。東西溝１は運河を埋め立てた後の地盤沈下部分で北に折れ、下部に瓦を詰めた暗渠（南北溝４）となり基壇の下を通過しています。東西溝１・２、南北溝４が内庭の整備にともなって埋められた後は、南北溝４の東に南北溝５を掘って、一時的に内庭側にたまった水を基壇の北側に排水したようです。運河埋め立て後の地盤沈下や基壇造成後の排水処理に苦慮した様子がみてとれます。

藤原宮大極殿と調査区全景（南から）
※大極殿を取り囲む回廊の北中央部が今回の調査対象地



飛鳥藤原第198次遺構平面図